

# 夜明け前より燐光色な

Moonlight Cradle

オーガストオフィシャルハンドブック  
2009年夏号

# FORTUNE ARTERIAL

— フォーチュン アテリアル —

▲ AUGUST

# P R E F A C E — ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

この小冊子が配布される夏コミでは、アンケート葉書などでたくさんご要望を頂いていたMCのサントラ『Future Passport』を発売することができました。特にボーカル曲「Marginality」は、シンシアルートの印象深いところで使用したこともあって、特に多くのお声を頂いていました。全曲リマスターして高音質になっておりますので、お聴き頂ければ幸いです。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみいただければと思います。

2009年夏 オーガスト/ARIA 拝

## CONTENTS

- 3 …… 夜明け前より瑠璃色な -Moonlight Cradle- マンガ  
花火に行こう!
- 7 …… 『FORTUNE ARTERIAL』ショートストーリー  
怪談の真相
- 10 …… スタッフ対談
- 11 …… あとがき



**FORTUNE ARTERIAL**  
—フォーチュン アテリアル—

花火大会  
……ですか？

はい、  
今日の仕事が終わったら  
二人で行きませんか？

ええ、  
さうじまじまじ

花火に行こう！

べっかんこう

満弦ヶ崎の  
花火大会は凄だから  
絶対驚くと思いますよ

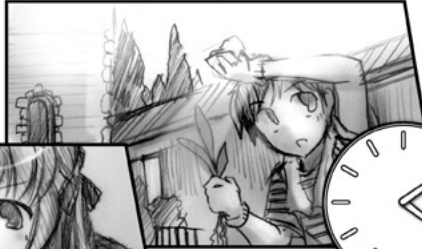
ふんてんてん

私はさう簡単には  
びっくりにしませんよ

何にせよ、今夜になれば  
ハッキリすることですけど

それでは遅れないように  
仕事を頑張らないと  
いけませんね

はい



……仕事、  
明日にしますか？

……



あ……



遊ぶために予定を  
遅らせるわけにはいきません

ダメです



ふう、これで  
最後ですね

お疲れ様でした

……会場までは  
どれくらい  
かかるのですか？

30分位ですね

では……今から  
行っても、

終わって  
しまいませんか

私なら大丈夫ですから

また来年行きましょう。  
楽しみが増えました

……

どこがないか……？

礼拝堂の近くで……  
……見晴らしの良い場所

た、達哉っ  
どうしたのですか!?

居住区の端ですー  
すみませんー！

チーン



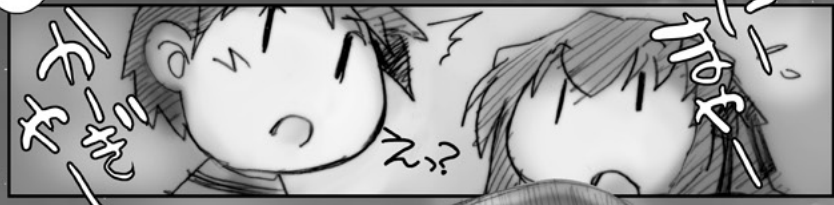
パッ

ドーン



エステルさん……

達哉……



おーっ

えっ?

おーっ



おーっ!

おわり





FORTUNE ARTERIAL Short Story

## 怪談の真相

安西秀明

夜の監督生室に、二つの男の影があった。  
金髪の男は、いつもは見せない真剣な様子で、長髪  
の男を睨んだ。

「征、どうしても駄目なのか」

「ああ」

「サンプルまで作ったんだぞ」

「捨てろ」

「もったいないだろ」

「事前に相談しないお前が悪い」

「捨てるのか……」

その時、金髪の男は、ひらめいた。

別の使い方をすればいいじゃないか、と。



「幽霊が出たんですって」

放課後の監督生室に、澄んだ声が響いた。

俺は文化祭予算の書類のチェックを止めて、声の主  
を見た。

副会長は、目安箱に入っていた紙を疑わしげな目で  
見ている。

「幽霊？」

「支倉くんは、幽霊はいると思う？」

「信じてないな」

「吸血鬼は目の前にいるけど？」

いたずらっぽい目で俺を見ている。

ふわふわとしたウェーブの髪が揺れていた。

……幽霊も副会長ほど可愛いのなら、会ってみても  
いいが。

「吸血鬼は見たから信じる。幽霊は見えないから信

じない。それだけだよ」

「わかりやすいわね」

「副会長はどうなんだ？」

「私は、吸血鬼しか信じてないわ」

勝ち気な瞳で言い切る。

幽霊なんてまったく怖れていないようだ。

「で、どうするんだ？」

「え？」

「その紙、生徒会への依頼なんだろ？」

「たのでなんとかしてください」とか

「被害も書いてないし、どうも胡散臭いのよね」

「なるほど」

今は、文化祭を控えた忙しい時期だ。

悪戯にかまけている時間はないが。

「ちなみに、場所はどこなんだ？」

「この一階よ。体育用具を取りに来た時、見たん  
ですって」

「一階の倉庫に幽霊か……」

がちやり。

ゆっくりと扉が開いた。

白い髪の少女が、震えていた。

「どうしたんだ、白ちゃん？」

「……実は、わたしも見たんです」

「え？」

俺たちは、顔を見合わせた。



監督生棟の一階は倉庫になっている。

扉を開けると、生徒会の資料やら、体育祭の大玉や  
ら色々な物が詰め込まれていた。

白ちゃんの話によると、この一番奥で何かが自分を  
見ているような気がしたのだという。

その時は、怖くてすぐに帰ってきたそうだ。

「……ここ、明かりつかないのよね」

「電灯を換えるべきだな」

「換えたけど、つかないのよ」

「ふむ」  
どこかで配線自体が切れてしまっているのだろうか。  
「行くわよ」

副会長は、薄暗い部屋に足を進めていく。  
俺はその後ろから入っていった。

普通は男が先を歩くよな……。  
普通、ね。

彼女は普通じゃないのだ。

「この明るさでも見えるのか？」

「多少はね」

副会長はれっきとした吸血鬼だ。

普通の女の子が、怖がって男に抱きついたりするシチュエーションでも、副会長には関係ない。

憧れはするが、期待しても無駄だろう。

「はあ……」

「なんのため息なわけ？」

「いや、別に」

「それにしても、相変わらずずつ、歩きつ、にくいわねっ」

大量の資料に足が埋もれそうになる。

副会長が足を上げるたびに、スカートがひらひらと持ち上がった。

うん、男が後ろを歩くのも悪くない。

「支倉くん」

スカートの揺れが止まった。

「どこを見ているのかしら？」

「転ばないように足もとを」

「それから？」

「副会長の足を」

素直に言った。

「あ、あのね、一応生徒会の仕事なんだから、真面目にやってよね」

「すまん」

俺が謝ると、副会長は赤くなった顔をふいと逸らした。

さつきよりも足が低く上がるようになる。

ここまで来ると、かなり暗い。

副会長が歩みを止めた。

「白ちゃんが言ってたのは、この棚の奥よね？」

「ああ」

俺が答えた後、沈黙が部屋を支配した。

副会長は、じつと棚を見つめている。

「……どうしたんだ？」

「別に」

そう言ったまま、動こうとしない。

様子がおかしい。

「もしかして、怖いのか？」

「まさか。私は吸血鬼よ。怖いはずがないじゃない」  
そうだよな。

「ただ、噂っていうのは学院生活を楽しくする場合もあるから、噂を消すのが正しいのかどうか自問自答をしていただけよ！」

びしつと俺に人差し指を突きつけた。  
指先が、ふるふると震えていた。

怖いのかよ。

「……なんだかんだ言って、年頃の女の子なんだな。ちよつと可愛いと思っちゃった。」

「なんで笑うのよ」

「なんでもない」

顔に出してしまったらしい。

「俺が見ようか」

「大丈夫よ」

意地っ張りめ。

副会長は、手で俺を制して棚の奥をのぞき込んだ。

「ひあっ！？」

「うあっ！？」

瞬間、何が起ったか理解出来なかった。  
俺の胸部を衝撃が襲い、締め付けられる。

ざりざりざり。

何かが絡まっついていて、動けない。

これが、

これが噂のポルターガイストツイストか！？  
ポルターガイストだっけ？

とにかく、締め上げられている！

「……あれ？」

なんだか人肌に温かくて心地よい。

恐る恐る顔を下に向けた。

ふわふわとした髪と、リボンらしきものが鼻先にある。

やたらと甘い香りがする。

つまり、俺は副会長に抱きつかれていた。

「な、なにやってんだ、副会長」

「いたの……」

小さく震える声。

まさか、幽霊が？

俺は、そんなもの信じていない。

それでも、背筋に冷たいものが走った。

俺はゆっくりと、棚の奥をのぞき込むように顔の位置を変えた。

そこには――

暗闇の中、空中に浮遊した女の子がこちらを見つめていた。

見間違いだらう。

じつと目を凝らす。

いつの間にか、自分が呼吸を止めていることに気がついた。

緊張で、体が強ばる。

やがて、暗闇の中から白く浮き上がった表情が、はっきりと見えてきた。

ふわふわの髪、勝ち気な瞳。

副会長にそっくりだ。

これは――

「……なんだ、鏡か」

一気に緊張が解けた。

鏡の角度のせいで、浮いているように見えているのだろうか。

「そんなはず、ないわ」

副会長が、震える声で言った。

「ちらりとしか見てないけど、鏡なんかじゃないわ」

そう言われて、俺は気がついた。

鏡なはずがない。

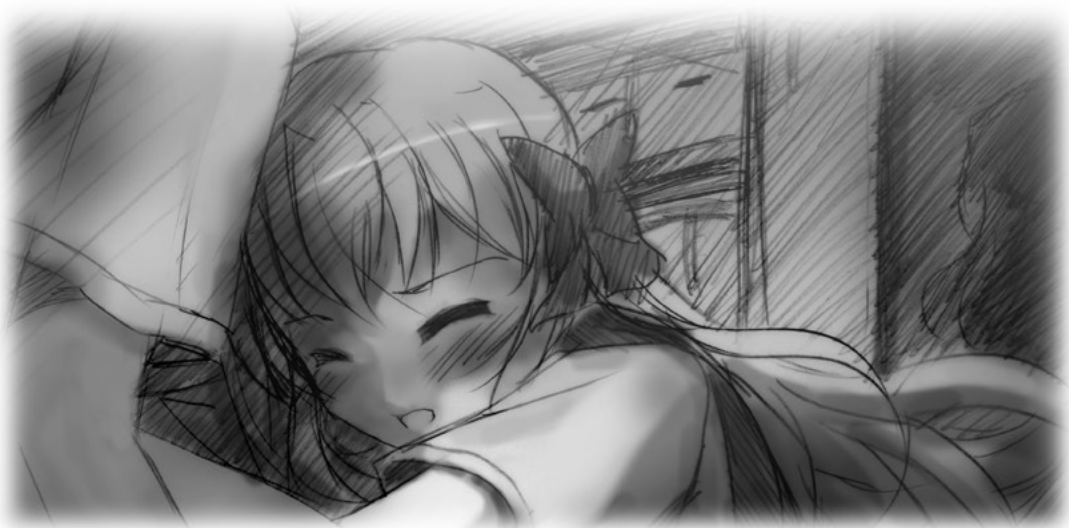
鏡なはずがない。



だつて副会長は今、それに背を向けて、俺にしがみついているじゃないか。  
刹那、何かの感情が弾けた。  
副会長を抱え、全力で走った。



「ああ、それ俺がつくつた瑛里華の等身大抱き枕」  
「はああー?」  
俺と副会長は、呆然とした。  
必死で二階に戻ってきた俺たちは、いつの間にか来ていた会長に顛末を話したのだが。  
「抱き枕?」  
「文化祭で生徒に売る気だつたんだけど、征に怒られてね」  
「当たり前でしょ!？」  
「採算が合わないって」  
「重要なのはそこじゃないから!!」  
「売れると思つただけだな……!」  
「まったく、余計なことばかりするんだから」  
「わたしの見間違いだつたんですね、すみませんでした」  
白ちゃんが申し訳なきさうに頭を下げた。  
「いやいや、俺だつて勘違いしたわけだし。ともかく幽霊じゃなくてよかった」  
「人騒がせにも程があるわよ」  
副会長は、ご機嫌ななめの様子で、自分の席に戻つていく。  
俺は会長に向き直つた。  
「もうちよつと置き場所考えてくださいよ。あんなところに抱き枕を吊したら、誰だつて怖がるに決まってるじゃないですか」  
「だつて、それが狙いだし」  
「はあ!？」  
確信犯かよ。  
「まさか、あの投書も会長の仕業ですか」



「正解。よくわかつたね」  
やっぱりか。  
全ては会長が仕組んだことだつたのだ。  
「……で、どうだつたんだい?」  
会長が俺に耳打ちしてくる。  
「何がですか」  
「瑛里華と二人きり、暗闇でドキドキ肝試し大会」  
「別に、どうもしないですよ」  
「クールだね。さつきは鬼のような形相で、瑛里華をお姫様だつこして飛び込んで来たくせに」  
「……」  
思い出すだけで恥ずかしい。  
会長の『お姫様だつこ』が聞こえたのか、副会長がこちらを見ていた。  
目が合う。  
なによ、とでも言いたげだ。  
少し頬が赤く染まっている。  
「うん、何より何より」  
会長は、俺たちの顔を見て満足げに頷いた。  
「いつたい何がしたいんですか」  
「俺はただ、二人が仲良くなればいいなあ、と思つてるだけさ」  
「余計なお世話です」  
「はっはっは」  
満足げに笑いながら席に戻つていった。  
「まったく……」  
白ちゃんの出してくれたお茶を飲みながら、仕事に取りかかる。  
俺は、会長の言葉を冗談だと思つていた。  
会長が、どうして俺たちをくつつけようとしていたのか。  
俺がその理由を知るのは、もつと後のことだつた。

END

神原拓(以下神):さてさて、今回のコミケでは『MC』のサントラが発売となりました。

べっかんろう(以下べ):そうですね。ジャケットはいつも通り描き下ろしですよ。

神:書き下ろしというが録り下ろしというが、新曲もありますので、どうぞよろしくお願いします。

べ:ところで、サントラのジャケット絵ではいつもヒロインがヘッドホンをしているんです。

神:ほほう。これまでは麻衣と翠、今回はシンシアでしたっけ?

べ:実は、はははは2やFAでもヘッドホンだったり。

神:あ、確か。お持ちでしたら見比べてみるのも楽しそうです。

べ:それでは一番ユーザーの皆様が気になっている情報であろう、新作について……。

神:残念ながら、今回の夏コミで発表、といは行きませんでした。

べ:楽しみにして下さった方も多いと思います。すみません。

神:どこのパートが遅れているってわけでもないですよ。

べ:色々進んではいるんですが、言えないのはもどかしいです。

神:タイミング的ははまだ、というプロデューサー判断ということでご理解いただければと。

べ:では、アンケート・葉書からいくつかご意見をピックアップしてみる企画をやってみましょう。

神:「髪を下ろした麻衣とのHシーンが見たかった」

べ:そうですね。髪型だけでなく衣装や時間、ライティングの割り振りも毎回悩みどころです。

神:悩みまくります。全ての皆様のご期待に応えるのは難しいですが、なるべく頑張っていきたくと思います。

べ:「過去の抱き枕・ぬいぐるみの再販売してほしい」

神:布ものは数が少ないと単価が跳ね上がってしまうのが辛いです。あと、イベントで商品の種類を増やすと販売速度が落ちてしまうジレンマも。かといって通販だけだとやはり数量が……うーん。

べ:コスト的は厳しいって感じてすかね。

神:「カレンさんのルートが無くて残念すぎる」

べ:僕も残念です。

神:私も残念です。

べ:「解像度はそろそろ800×600じゃなくてもいいのでは?」

神:システム担当の人によると高解像度になると結構重くなるみたいです。エフェクトとか。

べ:ワイド対応はそろそろ検討したいですよ。

神:先のことは分かりませんが、今回のアンケート・葉書の解像度の欄の集計も踏まえて、いろいろ考えていきたいと思ってます。

べ:16:9だとイベントCGの描き方が変わるので原画的にも色々考えないとなあ。

神:「ロゴ・ソックのアレをボイスをつけて欲しい」

べ:あれって、マスターアップきりきり作ってますからね。

神:ですね。収録はもう一ヶ月以上前と終わってしまってます。

べ:スタッフの遊び心なので、ご理解頂ければと思います。

神:「菜月は俺の嫁」

べ:ヒロイン選はプレイヤーの皆さん一人ひとりの心の中を……みたいなの?

神:あー、「いやいや、俺の嫁ですよ」とか言うのかと思った(笑)。きれいにまとめましたね。

2009.7.2 21:30 社内にて



# POSTSCRIPT - あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。  
お楽しみ頂けましたでしょうか。

さて、開発室では次回作の制作が進んでいます。  
進んでいますが……残念ながら、まだまだユーザーの皆様にお見せできる段階には達していません。一作ごとにより良い作品となるよう作り込んでいるのですが、そうするとどうしてもリリース間隔が延びてしまいます。大変お待たせしておりますが、新作情報としてお知らせできるようになるまでもう少々お待ち頂ければと思います。

『FORTUNE ARTERIAL』も、キャラクターソングやWebラジオをはじめとした展開が徐々に始まっています。先には更なる展開があるかも知れません。こちらも続報をお待ち下さい。

それでは、今回はこの辺で。  
今後とも、オーガスト/ARIAをよろしく願い致します。

2009年夏 オーガスト/ARIAスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック  
2009年夏号

※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!  
オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

<http://august-soft.com/>

<http://aria-soft.com/>



**FORTUNE ARTERIAL**  
—フォーチュン アテリアル—

夜明け前より燦爛色な

Moonlight Cradle

**SUMMER!**



# 夜明け前より瑠璃色な

Clouds and darkness descend about him, and a fire goeth before him, and burneth up his enemies. The hills melted like wax at the presence of the Lord, and trembled.

The hills melted like wax at the presence of the Lord, and trembled.

**Moonlight Cradle**

# FORTUNE ARTERIAL

—フォーチュン アテリアル—

オーガストオフィシャルハンドブック  
2009年夏号

